

移行対象の使用に関する発達的研究

藤 井 京 子*

A DEVELOPMENTAL STUDY ON TRANSITIONAL OBJECTS

Kyoko FUJII

415 mothers were asked whether their children had specially beloved objects or not, its description and in what circumstances they would use the objects, and so on. 90 mothers answered that their children had some kind of “transitional objects” (Winnicott, 1953). Hayashi II's method was used in order to examine whether there was any difference between “primary and secondary transitional objects” (Stevenson, 1954). The results showed that “secondary transitional objects” were used more as play objects than “primary transitional objects”. The second part of this study was to investigate whether children's possessing or not possessing the objects had relations to their mothers' attitude toward them. 43 mothers whose children possessed the objects and 97 mothers with children without objects were chosen and questioned on their attitude to their children. By ANOVA, it was shown that children's possessing or not the objects was related to their mothers' attitude toward them.

Key words: Specially beloved objects, primary transitional objects, secondary transitional objects, transitional objects, Winnicott.

問題と目的

Winnicott (1953) は、乳幼児が特定の物に対して愛着を示す現象について、“transitional objects”(移行対象)の概念を用いて、精神分析的解釈を行っている。彼によれば、移行対象は、乳房(あるいは母親)を象徴的に代理し、同時に、外的世界と内的世界の橋渡しをする、乳幼児の所有物である。このような移行対象の使用は、乳幼児が現実を受容していく過程を推進するのに役立つ一方で、“intermediate area”(中間領域; Winnicott, 1953)を作り始めると考えられている。

Winnicott は、この中間領域を、内的心的現実と、2人の個人の間に共通に知覚される外的世界の間にあると考え、子どもの遊ぶことや、芸術、宗教などの文化的分野に見ることができるものとしている。すなわち、乳幼児が現実を受容する段階へ発達してゆきながらも、その過程で見られた、移行対象の使用のような体験様式は、遊ぶことや、文化的分野などの中間領域において、発展、保持されると考えられている。このように、Winnicott は、移行対象のもつ発達的重要性を強調しているのだが、一方では、移行対象の使用に個人的パターンのある

ことを指摘しており、母親以外に移行対象のない場合も時にはありうると述べている。

Winnicott (1953) 以後、多くの研究者(例えば、Greenacre, 1969; Tolpin, 1971 など)により、移行対象の発達的重要性が論じられて来ているが、各研究者の見解は、Winnicott (1953) の見解とほぼ一致したものとなっている。すなわち、移行対象は、“soother”(「落ちつかせるもの」; Winnicott, 1953) として、心的緊張場面、特に入眠場面で、外的世界と内的世界を橋渡しするという重要な役割を果たし、かつ移行対象は、母親の象徴的代理物であると考えられている。

移行対象に関する最初の実証的研究は、Stevenson (1954) である。彼女は、移行対象に関する豊富なデータを収集することを研究目的とし、多くのケースを描写している。彼女以後の実証的研究は、移行対象の有無に焦点をあてたものと、乳幼児の移行対象とのかかわり方に関するものとの、2種の研究に大別できる。

まず、移行対象の有無に焦点をあてた研究を概観する。Horton, Louy, & Coppolillo (1974) の研究は、回顧的な情報に基づくものであり、人格障害者には、幼少期、移行対象の使用がほとんど見られなかったという結果から、情緒発達における移行対象の重要性を指摘している。また、Provence & Ritvo (1960) の研究は、施設

* 広島大学教育学部 (Department of Psychology, Faculty of Education, Hiroshima University)

収容児と家庭養育児を比較したもので、施設収容児には、移行対象の使用がほとんど見られないという結果を得ている。これらの研究結果は、乳幼児が、適切な環境のもとでこそ、移行対象を使用することができるという Winnicott (1953) の見解を裏付けるものであると考えられる。しかしながら、良好な情緒発達をしていると考えられるようなケースに、毛布・ぬいぐるみ等に代表されるような移行対象の使用が、必ずしも見られるわけではないことが、Stevenson (1954) によっても観察されている。この点に関して、Gaddini & Gaddini (1970) と、Hong & Townes (1976) は、移行対象の使用が多く見られた社会的集団と、使用の少ない集団を比較し、使用の少ない集団では、そうでない集団に比べ、母乳栄養の率が高く、その期間もより長いことや、子どもと両親と一緒に眠るケースがより多いことを明らかにしている。彼らの研究結果は、移行対象の使用の有無が、母親の養育態度から見ることでできる母子関係のパターンの違いを反映していることを示唆すると考えられる。しかしながら、そのような母子関係の観点から、移行対象の有無を扱った研究は、今のところ、ほとんどない。

次に、乳幼児の移行対象とのかかわり方に関する実証的研究としては、Busch (1974), Busch, Nagera, McKnight, & Pezzarossi (1973), Busch & McKnight (1977) を挙げることができる。この Busch を中心とする一連の研究は、母親へのインタビュー、及び、乳幼児の直接観察による縦断的研究であり、移行対象の使用の変遷において見ることでできるテーマや、バリエーションを描写している。

以上、移行対象に関する実証的研究を概観したが、実証的研究が理論的研究に比べ、少ないことが、Hong (1978) によっても指摘されている。その原因の1つとして、移行対象の基準の置き方の困難さを挙げることができる。従来の実証的研究では、移行対象を乳幼児が愛着を示す物とみなす点で一致しているが、愛着物の種類や、愛着発生の時期を、基準のひとつとして取り挙げている研究もある。例えば、Gaddini & Gaddini (1970) は、愛着物の中の、おしゃぶり、哺乳ビン等を、“precursors” (先駆物) として、移行対象と区別している。この先駆物を移行対象から除外する立場は、Busch を中心とする一連の研究 (1973, 1974, 1977) にも見出すことができる。彼らは、さらに、Stevenson (1954) の観察結果をもとに、移行対象への愛着発生時期が生後1年以内であれば、“primary transitional objects” (1次性移行対象; 1974年以降は、“primary” を “first” に改めている)、約2歳ごろに愛着の見られる対象を、“secondary transi-

nal objects” (2次性移行対象; 1974年以降、“secondary” を “second” に改変) としている。ただし、彼らによる分類の基礎となっている Stevenson (1954) の「1次性移行対象」、「2次性移行対象」という見解は、愛着発生の時期だけでなく、対象の種類 (毛布類か、ぬいぐるみ・人形など遊びの要素が強いものかという区別) も考慮した上での解釈である。Hong (1978) は、こうした従来の研究において用いられた移行対象の基準を整理し、先駆物を含む「移行対象等価物」、毛布類を代表とする「1次性移行対象」、ぬいぐるみ・人形などの「2次性移行対象」の3つに分類し、さらに、発達の観点を取り入れて、それぞれを発達的に位置付けたモデルを提案している。彼によれば、1次性移行対象は、月齢7～12か月に愛着が生じ、その愛着が5～6歳まで続き、接触欲求や分離不安などとの関係において重要な役割を果たすという。また、2次性移行対象は、2, 3歳頃に愛着が生じ、4歳以降まで使用される対象で、自律性や自立などとの関係において重要な役割を果たすと考えられている。この Hong (1978) のモデルは、対象の種類により、それが果たす発達の役割が異なることを示唆すると考えられるが、このモデルは、今のところまだ実証されていない。

そこで本研究では、先駆物を除外した、乳幼児の愛着物を移行対象として取り扱い、乳幼児の移行対象とのかかわり方のパターンを調べ、対象の種類による1次性移行対象と2次性移行対象のパターンの違いを明らかにすることにより、Hong (1978) のモデルの1部を実証することを、第1の目的とする。本研究の第2の目的は、移行対象の有無に焦点をあて、対象の有無と、母子関係のパターンとの関連を探ることにより、移行対象の使用に含まれる心理的意味を明らかにすることである。

調査 1

本調査の目的は、第1に、移行対象の出現率、対象の種類を調べ、乳児・幼児期前期のグループ (保育園の乳児クラス) と、幼児期後期のグループ (幼児クラス) を比較することである。第2に、移行対象の重要となる場面、対象の効用、対象のない時の子どもの様子について調べ、移行対象の使用法のパターンを抽出する。第3の目的として、1次性移行対象と2次性移行対象で使用方法のパターンを比較することにより、Hong (1978) の提案する移行対象の発達の位置付けを検討する。

方 法

調査対象 広島市内1保育園と防府市内3保育園の乳

児クラス(男児121名, 女児102名の計223名。平均月齢は26.0か月)と幼児クラス(男児84名, 女児108名の計192名。平均月齢61.4か月)の計415名。調査に対する回答は, 調査対象児の母親に求めた。

調査内容 ①移行対象の有無。本調査では移行対象の有無を, 「お子さんは, 何か決まったもの(例えば, 毛布, タオル, まくら, ぬいぐるみなど)を, いつも手放さずに持っていたり, 特に好んで使ったり, 特に大事にしていますか。」という形で質問し, ④はい, ⑤今はないが過去にあった, ⑥いいえの3回答のうち, 1つを選択するように求めた。②対象の種類と, 愛着発生時の子どもの月齢。③対象の重要となる場面。「眠るとき」, 「外出するとき」, 「旅行するとき」, 「ひとりのとき」の各4場面について, 1:「全く重要でない」, 2:「あまり重要でない」, 3:「時々重要である」, 4:「いつも重要である」の4カテゴリーのうち1つを選択させた。④対象の効用。「泣いたりぐずったりするとき, それを渡すと機嫌が良くなる」(“soother”の効用), 「それがあればひとりで眠ることができる」(入眠時の保護物), 「それがあれば母親がいなくても平気」(母親の代理物)の3効用。⑤対象のない時の子どもの様子。「落ちつきをなくす」, 「泣く」, 「怒る」, 「寝つきが悪くなる」の4つの様子。④, ⑤については, それぞれに対し, 1:「全くそうならない」, 2:「あまりそうならない」, 3:「時々そうなる」, 4:「いつもそうなる」の4カテゴリーのうち1つを選択させた。

手続 留置調査法。

調査期間 昭和57年10~11月。

結果と考察

乳児クラスと幼児クラスにおける移行対象の使用状況を, TABLE 1 に示した。TABLE 1 から, 移行対象出現率を求めると, 31.1%であった。また, TABLE 1 から, 現在, 移行対象を使用しているケースは, 乳児クラスが57ケース(25.6%), 幼児クラスが33ケース(17.2%)で, 乳児クラスが幼児クラスより多い傾向が認められた。移行対象出現時の平均月齢は, 乳児クラスで16.0か月(標

TABLE 1 乳児クラスと幼児クラスにおける移行対象の使用状況

移行対象の有無	乳児クラス	幼児クラス
移行対象あり(過去にあり)	69 (14)	58 (25)
移行対象と先駆物	2	0
先駆物あり(過去にあり)	8 (2)	5 (4)
移行対象なし	144	129
計	223	192

TABLE 2 乳児クラスと幼児クラスにおける移行対象の種類

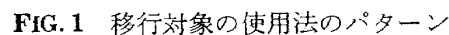
クラス	対 象 の 種 類					
	毛布・布団 シーツ タオル ハンカチ	ぬいぐるみ	まくら	ミニカー	その他	計
乳児クラス	22 (40.0%)	12 (21.8%)	7 (12.7%)	9 (16.4%)	5 (9.1%)	55 (100%)
幼児クラス	15 (45.5%)	9 (27.3%)	3 (9.1%)	2 (6.1%)	4 (12.1%)	33 (100%)
計	37 (42.0%)	21 (23.9%)	10 (11.4%)	11 (12.5%)	9 (10.2%)	88 (100%)

TABLE 3 カテゴリー・ウエイト表
第1軸($r=.636$)

カ	テ	ゴ	リ	ー	ウエイト
8	外出する時, いつも重要				2.85
12	旅行する時, いつも重要				2.26
ブ 36	対象がないと, いつも泣く				1.31
ラ 16	ひとりの時, いつも重要				1.30
39	対象がないと, 時々怒る				1.28
ス 20	“Soothe”としての効用が, いつもある				1.27
領 42	対象がなくても, あまり寝つきが悪くならない				1.27
域 27	母親代理物としての効用が, 時々ある				1.26
2	眠る時, あまり重要でない				1.25
31	対象がないと, 時々落ちつきをなくす				0.96
37	対象がなくても, 全く怒らない				-0.94
マ 13	ひとりの時, 全く重要でない				-1.15
イ 25	母親代理物としての効用が, 全くない				-1.18
ナ 29	対象がなくても, 全く落ちつきをなくさない				-1.22
ス 33	対象がなくても, 全く泣かない				-1.36
領 17	“Soothe”としての効用が, 全くない				-1.49
域 41	対象がなくても, 全く寝つきが悪くならない				-1.63
21	入眠時の保護物としての効用が, 全くない				-2.53
1	眠る時, 全く重要でない				-2.60

準偏差8.3), 幼児クラスで24.7か月(標準偏差14.5)であった。この結果は, 回想的データに基づくものであるために, 信頼性が薄い, 従来の研究(Winnicott, 1953; Stevenson, 1954; Busch et al., 1973; Busch, 1974; Busch & McKnight, 1977)において, 1歳以内とされてきた出現時期より, 遅くなるのではないと思われる。移行対象の種類について, 移行対象のみ使用中の88ケースをクラス別にみたものが, TABLE 2 である。TABLE 2 をもとに, χ^2 検定を行ったが, クラスの差は有意でなく, 加齢に伴う対象の種類の変化は否定された。

次に, 移行対象の使用法のパターンを得るために, 重要となる場面, 対象の効用, 対象のない時の子どもの様子の11項目(44カテゴリー)に関して, 数量化Ⅲ類の分



の安定度と命名した。第1軸を横軸に、第2軸を縦軸にして、カテゴリーを2次元平面に布置したものが、FIG. 1である。さらに、カテゴリー間の距離により、距離の近いカテゴリーをまとめたところ、FIG. 1に示されるように、移行対象の使用法に関して8パターンが得られた。Busch (1974)は、乳幼児が移行対象を必要とする場面について、入眠時、心的ストレス時、“inactivity”（無活動）の時、長期旅行時の4つを挙げている。FIG. 1の8パターンのうち、D. 眠りに関する型、B. 鎮静作用のある型、C. ひとりの場面型、A. 旅行・外出型が、

TABLE 4 カテゴリー・ウエイト表
第2軸 ($r=.541$)

カテゴリー	ウエイト
40 対象がないと、いつも怒る	6.12
36 対象がないと、いつも泣く	4.10
32 対象がないと、いつも落ちつきをなくす	3.19
プ 1 眠る時、全く重要でない	2.34
ラ 28 母親代理物としての効用が、いつもある	2.31
ス 20 “Soothe”としての効用が、いつもある	2.10
領 21 入眠時の保護物としての効用が、全くない	1.85
域 8 外出する時、いつも重要	1.31
24 入眠時の保護物としての効用が、いつもある	1.29
12 旅行する時、いつも重要	1.26
16 ひとりの時、いつも重要	1.19
44 対象がないと、いつも寝つきが悪くなる	1.11
23 入眠時の保護物としての効用が、時々ある	-0.96
マ 26 母親代理物としての効用が、あまりない	-0.96
イ 2 眠る時、あまり重要でない	-1.00
ナ 3 眠る時、時々重要	-1.21
ス 6 外出する時、あまり重要でない	-1.34
領 18 “Soothe”としての効用が、あまりない	-1.39
域 22 母親代理物としての効用が、あまりない	-1.41
10 旅行する時、あまり重要でない	-1.69

Busch(1974)による4場面にそれぞれ該当すると思われる。しかし、旅行・外出時のみ関連のある型のGや、入眠を含む心的ストレスと関連する型のHを考慮に入れるならば、移行対象の使用法のパターンは、旅行・外出時に必要となる型(A, G)と、入眠を含めた心的ストレス時に必要となる型(B, C, D, H)に大別できるのではないかと考えられる。

次に、被験児の数量化の結果を、1次性移行対象(毛布、タオル、シーツ類)と2次性移行対象(ぬいぐるみ、人形、ミニカーなど)別に2次元平面に布置したものを、FIG. 2に示した。FIG. 2において、対象の種類による分布の違いが見られるが、Hong(1978)の提案する移行対象の発達の位置付けを検討するために、さらに、数量化Ⅱ類の分析を行った。TABLE 5に、取りあげたアイテム・カテゴリー、数量化Ⅱ類の手続で与えられた数値および偏相関係数の値を示した。TABLE 5のカテゴリー数量のうち、正の方向は1次性移行対象へ、負の方向は2次性移行対象へ、それぞれ作用している。TABLE 5に示されるように、11対象がないと寝つきが悪い、2外出時の重要度、9対象がないと泣く、4ひとりの時の重要度の順に影響を与えていることがわかる。すなわち、1次性移行対象を使用する子どもは、対象がないと寝つきが悪くなったり泣いたりすることが多く、2次性移行対象は、外出時やひとりの時に重要となることを意味し

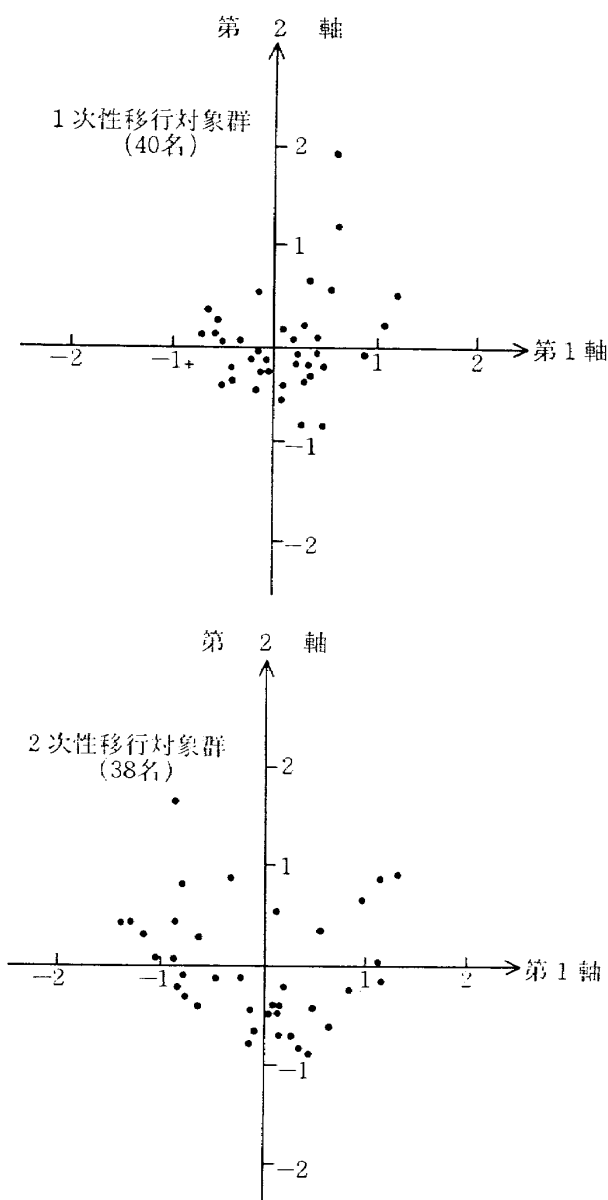


FIG. 2 78被験児の対象の種類別配置図

ている。中でも、1次性移行対象か2次性移行対象かによって、対象が重要となる場面が異なることを考慮するならば、2次性移行対象は、1次性移行対象に比べ、外的世界と内的世界の橋渡しをし、また母親を象徴的に代理するという、移行対象の本質が薄れ、“play objects”(遊びの対象: Brody, 1980)としての意味が大きくなるのではないかと想像される。したがって、Hong(1978)の提案するように、2次性移行対象を使用する段階を、1次性移行対象を使用する段階より後に、発達の位置付けを行うことは妥当であると考えられる。

調査 2

本調査は、移行対象の使用の有無に焦点をあてたものであり、Gaddini & Gaddini (1970) や Hong & Townes

TABLE 5 1次性、2次性移行対象に関するアイテム・
カテゴリーと数量化

アイテム	カテゴリー	カテゴリー —数量	偏相関係数
1 眠る時の 重要度	1 全く重要でない	-37.83	.341 (第5位)
	2 あまり重要でない	18.65	
	3 時々重要	-80.12	
	4 いつも重要	50.13	
2 外出時の 重要度	1 全く重要でない	83.25	.454 (第2位)
	2 あまり重要でない	-138.76	
	3 時々重要	-58.88	
	4 いつも重要	-136.73	
3 旅行時の 重要度	1 全く重要でない	14.59	.334 (第6位)
	2 あまり重要でない	-36.24	
	3 時々重要	-119.67	
	4 いつも重要	99.30	
4 ひとりの 時の重要 度	1 全く重要でない	30.51	.403 (第4位)
	2 あまり重要でない	69.83	
	3 時々重要	52.39	
	4 いつも重要	-153.43	
5 “Soothe” の効用	1 全く効用がない	-21.37	.204 (第10位)
	2 あまり効用がない	-73.99	
	3 時々効用がある	11.81	
	4 いつも効用がある	59.42	
6 入眠時の 保護物の 効用	1 全く効用がない	-117.37	.273 (第9位)
	2 あまり効用がない	60.26	
	3 時々効用がある	8.62	
	4 いつも効用がある	-6.28	
7 母親代理 物の効用	1 全く効用がない	-19.31	.290 (第8位)
	2 あまり効用がない	-74.90	
	3 時々効用がある	64.28	
	4 いつも効用がある	79.22	
8 対象がな いと落ち つきをな くす	1 全くそうならない	15.12	.167 (第11位)
	2 あまりそうならない	-1.19	
	3 時々そうなる	3.34	
	4 いつもそうなる	-103.31	
9 対象がな いと泣く	1 全くそうならない	-100.05	.447 (第3位)
	2 あまりそうならない	-5.85	
	3 時々そうなる	115.38	
	4 いつもそうなる	-24.53	
10 対象がな いと怒る	1 全くそうならない	46.99	.294 (第7位)
	2 あまりそうならない	-56.65	
	3 時々そうなる	-34.01	
	4 いつもそうなる	-221.08	
11 対象がな いと寝つ きが悪い	1 全くそうならない	-84.48	.504 (第1位)
	2 あまりそうならない	-115.90	
	3 時々そうなる	33.22	
	4 いつもそうなる	176.06	

(1976)と同じ観点に立つものである。本調査では、特定の毛布やぬいぐるみ等の物に愛着を示すといった様式で現われる移行対象の有無が、母子関係のパターンの違いを反映していると考え、母親の養育態度から、そのパターンの違いを明らかにすることを目的とする。

TABLE 6 母親の養育態度に関する質問項目

番号	質 問
1	子どもを育てることは、わたしの生きがいだと思う。
2	現在のわたしは、子どものことよりも、つい自分の仕事を優先させてしまう。
3	子どもの行儀をよくするために、罰を与えるのは正しいことだと思う。
4	子どもが望むままの自由を与えている。
5	子どもには、だれよりもわたしになつてほしい。
6	子どもの欠点がどうしても目につく。
7	子どもがわたしの分身であるように感じる。
8	夜ねる時間のことは、やかましくいわない。
9	子どもが小さいうちに、よそ(近所や実家、保育園など)にあずけるのは、子どもがかわいそうな気がする。
10	子どもがわたしを頼りにしていることがわかると、うれしい。
11	わたしが忙しいときに、子どもがうちで騒ぐと、いらいらすることがある。
12	子どもにきまりを守らせるために、口やかましくいったりすることはない。
13	子どもは小さいのだから、いろいろ気を配ってやらなければならないと思う。
14	わたしを困らせるようなことを子どもがすると、腹をたてることがよくある。
15	子どもがよくない行ないをしていても、あまり気にかけない。
16	子どもが悪い時は、たいてい、なにかのかたちで罰する。
17	これまでに、やむをえず、子どもにさびしい思いをさせたことがある。
18	わたしは、その日の気分によって、子どもへの接し方が異なる。
19	子どもが泣いたりむずかかったりした時、乳房をふくませたことがよくある。
20	子どもが小さいうちに、ひとり寝をさせるのは、子どもがかわいそうな気がする。

方 法

調査対象 調査1の対象児のうち、乳児クラスで、移行対象を使用中の43ケース(平均月齢28.6か月)と、移行対象のない97ケース(平均25.7か月)の計140ケース。調査に対する回答は、対象児の母親に求めた。

調査内容 母親の養育態度について、小嶋(1971)による質問項目を参考にし、20の質問項目を用意した(TABLE 6 参照)。各質問に対し、1:「まったくあてはまらない」、2:「あまりあてはまらない」、3:「少しあてはまる」、4:「かなりあてはまる」、5:「とてもあてはまる」の5つのカテゴリーのうち1つを選択させた。

手続 留置調査法。

調査期間 昭和57年11月～12月。

結果と考察

20項目について、主因子解法で因子を抽出し(固有値1.4以上)、ヴァリマックス回転後、3因子を得た。因子Ⅰに含まれる項目は、質問番号1, 7, 9, 10の4つであり、因子Ⅱには、6, 11, 14, 18の4つ、因子Ⅲには、3, 12, 15, 16の4つが含まれていた。各因子に含まれる質問内容を考慮した上で、因子Ⅰを「心理的密着度」、因子Ⅱを「拒否」、因子Ⅲを「ゆるやかな統制」と命名した。各因子ごとに、「とてもあてはまる」(5点)～「まったくあてはまらない」(1点)として合計得点を出し、それを個人得点とした。なお、質問番号3, 16については、「とてもあてはまる」(1点)～「まったくあてはまらない」(5点)としている。したがって、得点が高いほど、因子Ⅰでは心理的密着度が強く、因子Ⅱでは拒否的傾向が強いことを、また因子Ⅲでは、統制がゆるやかであることを意味している。以下の分析では、調査対象児の年齢により、低年齢群(0歳児クラス、平均月齢13.2か月)、中年齢群(1歳児クラス、平均25.0か月)、高年齢群(2歳児クラス、平均35.9か月)に分けている。

移行対象の有無と年齢群別に、各因子の平均得点を求め、TABLE 7, TABLE 8, TABLE 9に示した。まず、TABLE 7をもとに、2(移行対象の有無)×3(年齢)の分散分析を行ったところ、主効果は、対象の有無、年齢のいずれにおいても有意でなかったが、対象の有無と年齢の交互作用が見られた($F(2, 134)=7.30, p<.001$)。下位検定の結果、低年齢群では、対象有り群の平均得点が、無し群よりも有意に低く、高年齢群では、有り群が無し群よりも有意に高くなっていた。また、有り群では、年齢が高くなるにつれ、平均得点も高くなるが、無し群では、各年齢群の平均得点間に有意な差は認められなかった。次に、TABLE 8をもとに、同様に、2×3の分散分析を行ったが、主効果、2要因間の交互作用のいずれも有意でなかった。また、TABLE 9をもとに、同様に分散分析を行ったが、年齢の主効果のみ、有意であった($F(2, 134)=4.23, p<.017$)。これらの結果から、移行対象の有無は、母子関係における心理的密着度と関連していることがわかる。したがって、移行対象は、有り群が無し群よりも心理的密着度の弱い低年齢群では、母子間の心的距離を縮小し、逆に有り群の方が心理的密着度の強い高年齢群では、心的距離を拡大するといった、母子間の心的距離を調整する働きをするのではないかと考えられる。

次に、TABLE 7, 8, 9をもとに、年齢群別に2(移行対象の有無)×3(因子)の分散分析を行った。低年齢群

TABLE 7 因子Ⅰ(「心理的密着度」)の平均得点

移行対象 の有無	年 齢		
	低年齢群	中年齢群	高年齢群
有 り	11.75	13.39	15.77
N=43	(n=8, SD=2.66)	(n=13, SD=2.60)	(n=22, SD=3.01)
無 し	14.14	13.98	13.28
N=97	(n=21, SD=3.25)	(n=44, SD=2.63)	(n=32, SD=2.54)

TABLE 8 因子Ⅱ(「拒否」)の平均得点

移行対象 の有無	年 齢		
	低年齢群	中年齢群	高年齢群
有 り	11.63,	11.23	12.82
N=43	(n=8, SD=2.33)	(n=13, SD=2.71)	(n=22, SD=3.05)
無 し	11.05	11.48	11.38
N=97	(n=21, SD=3.04)	(n=44, SD=2.57)	(n=32, SD=2.09)

TABLE 9 因子Ⅲ(「ゆるやかな統制」)の平均得点

移行対象 の有無	年 齢		
	低年齢群	中年齢群	高年齢群
有 り	10.00	10.85	9.27
N=43	(n=8, SD=2.33)	(n=13, SD=2.76)	(n=22, SD=2.39)
無 し	11.24	9.50	9.22
N=97	(n=21, SD=2.59)	(n=44, SD=2.72)	(n=32, SD=2.14)

では、対象の有無の主効果($F(1, 27)=4.35, p<.05$)、因子の主効果($F(2, 54)=5.75, p<.01$)が有意であった。下位検定の結果、対象有り群は無し群より心理的密着度が弱く、また、有り群では3因子間の差がなく、無し群では、因子Ⅰが他の2因子より高くなっていることがわかった。中年齢群では、因子の主効果のみが有意であった($F(2, 110)=32.03, p<.01$)。すなわち、因子Ⅰが他の2因子よりも高くなっていた。高年齢群では、対象の有無の主効果($F(1, 52)=90.69, p<.01$)、因子の主効果($F(2, 104)=49.92, p<.01$)、対象の有無と因子の交互作用($F(2, 104)=3.79, p<.05$)の全てが有意であった。下位検定の結果、対象有り群は無し群より、心理的密着度が強く、拒否的傾向が大きいことがわかった。また、両群とも、因子Ⅰ, Ⅱ, Ⅲの順に得点が低くなっていた。これらの結果から、対象無し群では、各年齢群とも、心理的密着度が強く、拒否的傾向やゆるやかな統制傾向は小さいというパターンを見出すことができる。一方、対象有り群では、中・高年齢群において、同様のパターンが見出せるが、低年齢群のみ、心理的密着度が弱く、他の2因子との差が見られなかった。このことは、移行対象の出現

が、母子間の弱い心理的密着度と関連し、低年齢群の移行対象は、弱い心理的密着度を補う母親代理物としての心理的意味をもつことを示唆すると考えられる。また、高年齢群においては、有り群が無し群よりも、心理的密着度が強く、拒否的傾向が大きくなっていた。この母親の養育態度が、子どもに心的ストレスを生じさせると考えられることから、高年齢群での移行対象は、その心的ストレスを緩和する“soother” (Winnicott, 1953) の機能を持つのではないかとと思われる。対象有り群における、加齢に伴う母子関係のパターンの変化は、移行対象の使用に含まれる心理的意味が、母親代理物から“soother”へと変化することを示唆すると考えられる。しかし、子どもが愛着物をもつことに対する母親の否定的見解が、母子関係のパターンの変化に寄与していることも想定され、今後、この点を検討する心要があろう。

全体的考察

従来の研究では、毛布類などの1次性移行対象と、ぬいぐるみ・人形などの2次性移行対象が区別されずに扱われるか (Gaddini & Gaddini, 1970; Hong & Townes, 1976), 1次性移行対象のみを研究するか (Busch et al., 1973; Busch, 1974; Busch & McKnight, 1977); Busch; Busch & McKnight であった。これら2種の移行対象の使用法が異なるという調査1の結果は、それぞれが異なる発達の役割を果たすという見解 (Busch et al., 1973, Busch, 1974, Busch & McKnight, 1977; Hong, 1978) を支持するものであると考えられるが、調査1で加齢に伴う対象の種類の変化が見られなかったことから、1次性移行対象と2次性移行対象が、それぞれどのような発達の価値を持つかは不明である。さらに、移行対象の有無と母子関係のパターンとの関連が、子どもの年齢により異なるという調査2の結果をも考慮するならば、移行対象の出現に影響を与える要因、対象の使用に含まれる心理的意味、対象の使用と関連する発達の側面は、子どもの年齢や対象の種類により異なると想像される。したがって、今後の研究課題としては、従来の研究で不足している2次性移行対象に関する研究を行い、1次性移行対象と比較することにより、1次性移行対象と2次性移行対象の明確な発達の位置付けを行うこと、また、1次性移行対象と2次性移行対象を区別し、さらに子どもの年齢を考慮に入れた上で、移行対象の有無を母子関係の観点から扱うことであると考えられる。

引用文献

Brody, S. 1980 Transitional objects: Idealization of a

phenomenon. *Psychoanalytic Quarterly*, 49, 561-605.

Busch, F. 1974 Dimensions of the first transitional object. *The Psychoanalytic Study of the Child*, 29. New Haven: Yale University Press, 215-229.

Busch, F., Nagera, H., McKnight, J. & Pezzarossi, G. 1973 Primary transitional objects. *Journal of the American Academy of Child Psychiatry*, 12, 193-214.

Busch, F. & McKnight, J. 1977 Theme and variation in the development of the first transitional object. *International Journal of Psycho-Analysis*, 58, 479-486.

Gaddini, R. & Gaddini, E. 1970 Transitional objects and the process of individuation: A study in three different social groups. *Journal of the American Academy of Child Psychiatry*, 9, 347-365.

Greenacre, P. 1969 The fetish and the transitional object. *The Psychoanalytic Study of the Child*, 24. New York: International Universities Press, 144-164.

Hong, K. M. & Townes, B. D. 1976 Infants' attachment to inanimate objects: A cross-cultural study. *Journal of the American Academy of Child Psychiatry*, 15, 49-61.

Hong, K. M. 1978 The transitional phenomenon: A theoretical integration. *The Psychoanalytic Study of the Child*, 33. New Haven: Yale University Press, 47-79.

Horton, P. C., Louy, J. W., & Coppolillo, H. P. 1974 Personality disorder and transitional relatedness. *Arch. Gen. Psychiatry*, 30, 618-622.

小嶋秀夫 1971 幼児の知的機能とインヴェントリーで測った母親の態度と行動 金沢大学教育学部紀要 (人文科学編), 20, 29-44.

Provence, S. & Ritvo, S. 1961 Effects of deprivation on institutionalized infants: Disturbances in development of relationships to inanimate objects. *The Psychoanalytic Study of the Child*, 16. New York: International Universities Press, 189-204.

Stevenson, O. 1954 The first treasured possession: A study of the part played by specially loved

objects and toys in the lives of certain children.
The Psychoanalytic Study of the Child, 9. New
York : International Universities Press, 199-217.

Tolpin, M. 1971 On the beginnings of a cohesive
self: An application of the concept of trans-
muting internalization to the study of the tra-
nsitional object and signal anxiety. *The Psy-
choanalytic Study of the Child*, 26. New York/
Chicago: Quadrangle Books, New York Times,
316-362.

Winnicott, D. W. 1953 Transitional objects and
transitional phenomena: A study of the first not-
me possession. *International Journal of Psycho-
Analysis*, 34, 89-97.

付記

本論文は、広島大学大学院へ提出された昭和57年度修
士論文の一部を加筆修正したものです。本研究を御指導
いただきました広島大学山本多喜司教授と今泉信人助教
授に、深く感謝します。

(1984年12月24日受稿)